

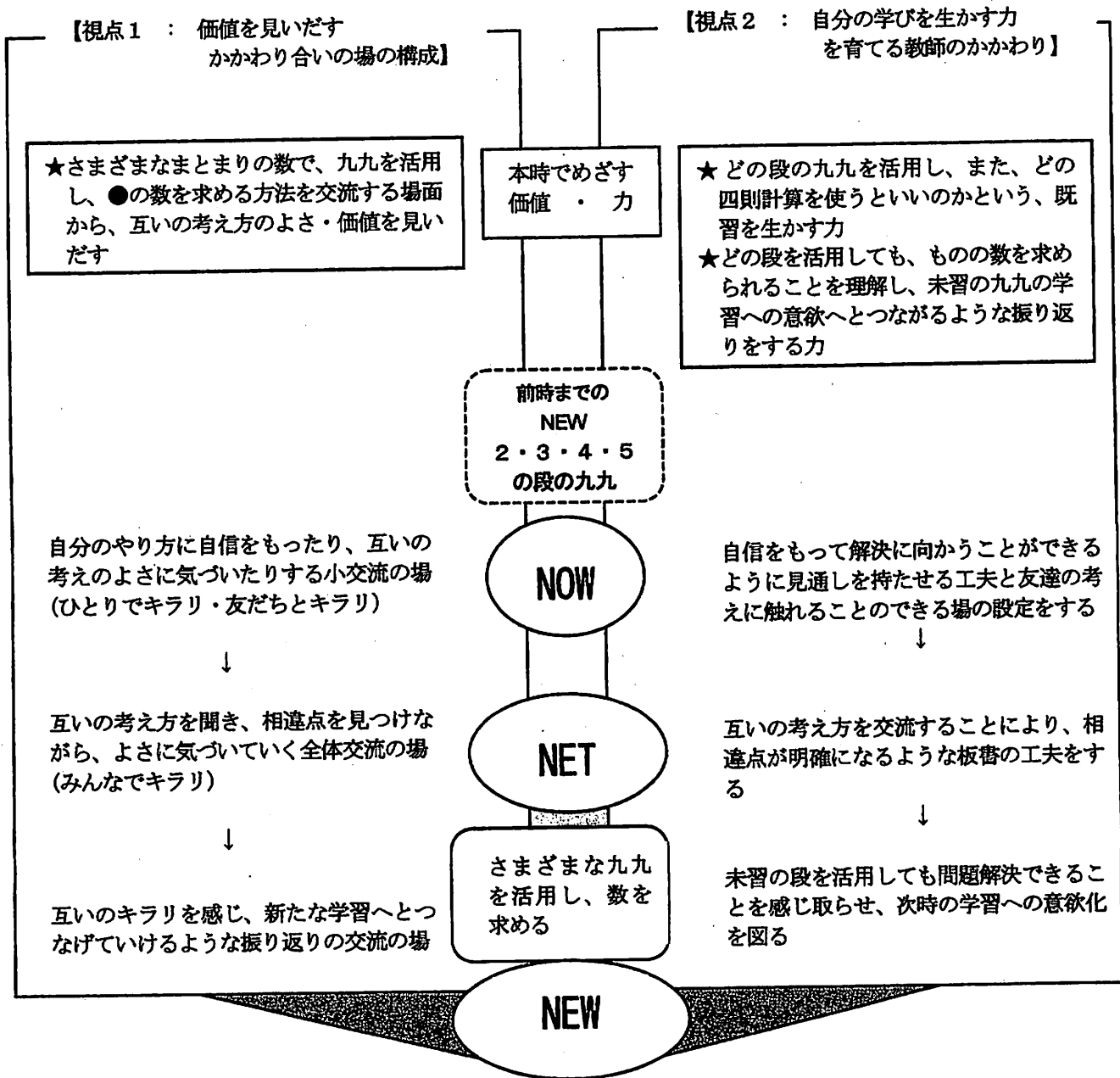
第2学年 算数科学習指導案

「かけざん(1)」

日時：平成17年10月21日(金)
 児童：2年1組 39名
 指導者：教諭 三浦 恵

1. 本時の学習

(1) 視点にかかわる本時の主張



キラリが響き合う子供の姿
 さまざまなまとまりをもとに、数を求めている互いの考えを交流することで、今まで学習した九九を活用し、ものの数の求め方をかけ算を活用して工夫することができることに気づく子供

(2) 本時の目標

・既習の九九を活用し、問題を解決することを通して、新たな九九への見通しをもつことができる。

【数学的な考え方】

☆友達のやり方から、かけ算を利用し、いろいろな解決方法で問題を解決することを楽しむことができる。

【かかわり合い】

(3) 本時の展開 (23時間扱い 本時 23/23)

キラリが響き合う学習活動と手だて

○課題の把握

視点1 : 価値を見いだすかかわり合いの場の構成

〈既習を想起し、見通しをもつ場の設定〉

〈自分の考えに自信をもったり、友達の考えを知ったりする小交流の場の設定〉

- ・どの段の九九を使おうか
- ・欠けているところがあるよ
- ・かけざんだけでできるかな
- ・分け方を考えよう
- ・1つの九九ではできないかもしれない
- ・たしざんやひきざんを使えば、できそう

どの段を使えばいいかな

○課題の追究・交流

ひとりでキラリ



友だちとキラリ

視点2 : 自分の学びを生かす力を育てる教師のかかわり

〈既習の九九の確認〉

〈交流の組織化〉

交換法則に気付かせるとともに、上の段への意識をもたせるような交流をさせる

<p>2の段を使って</p> $2 \times 9 = 18$ $2 \times 3 = 6$ $18 + 6 = 24$ <hr/> $2 \times 12 = 24$	<p>3の段を使って</p> $3 \times 8 = 24$ <hr/> <p>4の段を使って</p> $4 \times 6 = 24$	<p>5の段を使って</p> $5 \times 4 = 20$ $20 + 4 = 24$ <hr/> $5 \times 6 = 30$ $30 - 6 = 24$	<p>もっと上の段を使えたら</p> $6 \times 4 = 24$ <hr/> $8 \times 3 = 24$ <hr/> $9 \times 2 = 18$ $2 \times 3 = 6$ $18 + 6 = 24$
---	--	---	--

〈式から、分け方を読みとる活動を通し、互いのやり方を認める全体交流の場設定〉

〈「1つ分」「いくつ分」を意識させる〉

〈互いの学びのよさを次の学習につなげる振り返りの場の設定〉

〈「1つ分の大きさ」の拡張をはかる〉

今まで習った九九を使って、数を求めることができた
習っていない段の九九でも、できそう

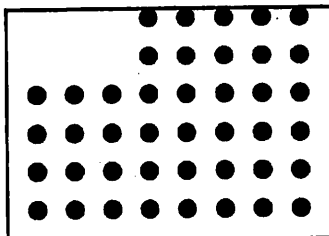
〈考え方・思いの交流を板書で整理する〉

○振り返り

- ・いろいろな段を使って、数を求めることができたよ
- ・たしざんやひきざんを使う考えもあるんだね
- ・もっと上の段を早く覚えたいな

〈新たな九九の学習への意欲付けとなるような振り返り〉

○追体験



〈新たな九九への意欲付けをはかる〉

2. 単元について

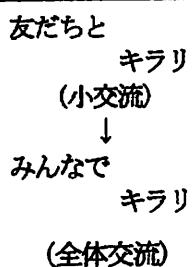
(1) キラリが響き合う授業に向かって

子供自ら九九をつくり出す学習

かけ算は、2年生の学習の中心と言っても過言ではないと考える。子供だけでなく、家庭でもこのことを強く意識し、この学習に入る前にすでに九九の暗唱ができる子供が多い。問題は、九九を暗記するだけに終わってしまう学習になりがちなどころである。できているものを単に暗記するだけでなく、子供自らが九九をつくり出したり、答えの並び方やきまりを見つけ出したりする学習を進めることを大切にしていきたい。

本単元では、「キラリ遊園地」という場の設定で、コーヒーカップや観覧車、ゴーカート等に乗っている人の数を求めるという展開をする。そこで、自分たちが遊園地で遊んでいるような楽しみを感じながら、かけ算の意味について理解した後、5の段・2の段において答えがいくつずつ増えているのかに気づくようにし、3の段・4の段ではそのことを活用して九九を構成するように展開していく。また、本単元の最後には、九九の学習全てを終えたところで学習するような発展的な問題を扱うように単元を構成してみた。そこでは、式とアレイ図を結びつけ、式をよみあう活動を通して、かけ算は使うと便利だということを感じさせるとともに、もっと大きな数の九九が分かっていたら、簡単に答えを求めることができそうだという思いをもたせることで、次の単元への期待感や意欲をもたせたいと考えている。

視点1: 価値を見いだすかかわり合いの場の構成



自分なりに考えたやり方を互いに交流(友だちとキラリ)することによって、自分のやり方に自信をもったり、新たな発見をしたりすることができるという「かかわり合うこと」のよさを実感する場を設ける。

また、全体交流(みんなでキラリ)では、互いの考えをつなげたり、話し合いを焦点化したりするために、一人一人の考え方がどこに位置づいているのかを板書などで明確にする。

視点2: 自分の学びを生かす力を育てる教師のかかわり

算数的活動を大切に

何のいくつ分というとらえ方を強く意識できるような問題を設定し、その問題場面を積み木で表したり、図や絵で描いたりする。目や手で実際に確かめることのできる活動を多く取り入れて、実感を伴う体験を積み重ねよう心がける。

自分の学びの足跡を生かして

既習事項をいつでも振り返ることのできる環境づくりをするように心がける。前時までに子供たちが見つけたきまりや法則を積極的に活用できるようにするため、これらの事柄をまとめて、教室に掲示しておくようにする。2の段で用いたきまりが3の段でも4の段でも使えるというように、前の学習が、ずっとつながっていくことに気づくことができるようにする。

また、今日の学習でわかったこと・わからなかったこと・発見したこと・友達のキラリなどを「今日のキラリ」として毎時間書くようにする。その「今日のキラリ」が次時に生きていくように、教師はコメントやアドバイスを書くとともに、一人一人の学びを価値づけることで、学びを身につけさせる。

(2) 単元の目標

- 〈関心・意欲・態度〉 乗法のよさについて気付き、ものの全体の個数をとらえるときに進んで乗法を用いようとする。
- 〈数学的な考え方〉 乗法九九が用いられている場合について、「1つ分の大きさ」「いくつ分」をとらえて全体個数の求め方について考える。
- 〈表現・処理〉 乗法が用いられている場合を具体物や式で表すことができる。
乗法九九を構成し、確実に唱えることができる。
- 〈知識・理解〉 乗法が用いられる場合を理解する。
乗法九九の構成の仕方を理解する。

(3) 指導計画 (23時間扱い 本時 23/23)

